

Henry Lewis (1942). 'The Sir John Rhys Lecture: The Sentence in Welsh', *The Proceedings of the British Academy*, vol.xxviii

小池剛史

初めに

カムライグ語の語順は通常[動詞+主語+...]という語順を取るとされ、主語が動詞の前に現れるような文は、主語を強調する「強調構文」または「非通常文」として扱われている。しかし[主語+動詞+...]という文構造の例文は中期カムライグ語期から現在に至るまでの文献資料に無数に残されている。近代になってこの文構造は英語の語順を模倣したものであるとされて非難された結果、上述したような扱いを受けるに至った。[主語+動詞+...]という語順は今でこそ避けるべき文構造と見做されているものの、かつては極めて普通の語順であり、カムライグ語史の始まり以前のブリティッシュ方言、更に大陸ケルト語時代から発達してきた「由緒ある」文構造である。Lewis はこの論文で、[主語+動詞+...]と[動詞+主語+...]という二つの文構造がブリティッシュ方言からカムライグ語史を通じて競合しつつ発達した過程を実証的に説明している。以下、Lewis の説明を 1. ～ 6. に要約する。

1. ゴール語について

John Rhys のフランス・イタリアのオガム文字碑文研究('Celtic Inscriptions of France and Italy')に掲載されている 17 の碑文の内、すべてにおいて主語が文頭に来る (内 14 文では主語+動詞、3 文では主語+目的語+動詞、)。これ以外の二つの例で[目的語+動詞+主語]という語順がある。更に 2 つの「落書き文」(graffiti)、二つの「Todi 二言語碑文」では、動詞が文頭に来ている。これらの事から、ゴール語では[主語+動詞+...]という語順は多いが、その他の語順も可能であった、という結論を出している。ゴール語が屈折語尾の豊かな言語であったこと理由の一つに挙げている。

2. ブリティッシュ方言、カムライグ語への発達

ブリティッシュ方言はまだ屈折語尾を豊かに残していたので、統語論についてはゴール語とさほど変わりはなく、語順は自由であった。しかし、ブリティッシュ方言がカムライグ語及びその姉妹言語に分岐するまでの間、語順に関する何らかの規則が生まれていたに違いない。ただその規則は、ある一つの語順が常に使われ続けるというような状態ではなかった。カムライグ語史の初めについては諸説あるが (Morris-Jones によれば 550 年頃)、ローマ人の占領期間 (約 43AD～410AD) 及びその後のアングロサクソン人の侵入 (約 450 年頃)

という社会的に不安定な時期を通じ、ブリティッシュ方言は名詞が語形変化語尾を失い、文中での位置が統語機能を表示するようになった。

### 3. 動詞が文頭に来る語順の発達

動詞が文頭に固定された原因となったのは、Vendries の説によれば、複合動詞が人称代名詞の目的語と共に用いられたためであると述べている。複合動詞とは、動詞が何らかの動詞前接辞と動詞（語根＋屈折語尾）からなるものである。目的語が人称代名詞の場合、人称代名詞の目的語は複合動詞の動詞前接辞の後ろに結び付き、[前接辞＋人称代名詞＋動詞]というパターンが生まれ、これが文頭に来て、その他の要素（例えば主語）はその後に来るようになる。即ち次のような文構造が生まれるのである。

#### [動詞前接辞＋人称代名詞＋動詞]＋[主語] (パターン A1)

- (1) to-            -med-        -clai    Obalda natina (ゴール語)  
(2) dy-            -m-        -kyueirch    pawb ... (中期カムライグ語)

カムライグ語においてこのパターンは動詞が単純動詞（語根＋屈折語尾のみから成るもの）の場合にも広がった。その場合には人称代名詞が結合する位置として動詞前虚辞が文頭に起こり、その後ろに置かれるようになった。

#### [動詞前虚辞＋人称代名詞＋動詞]＋[主語] (パターン A2)

- (3) neu-            -m            karws    Ywein

更にこのパターンは、目的語が名詞の場合にも、また動詞が自動詞で目的語そのものがない場合にも広がり、現代カムライグ語の語順が完成する。

#### [動詞前虚辞＋動詞]＋[主語] (+[目的語]) (パターン A3)

- (4) Fe            garodd    Owain    y bardd  
(5) Fe            canodd    Owain                    ((5)(6)は共に小池の例文)

### 4. Duw a ddywedodd ... のパターンの発達

同時に、大陸ケルト語より伝わる[主語＋動詞＋…]の語順も共存していた。動詞が複合動詞で目的語が人称代名詞の場合には、不変化詞として複合動詞の前接辞の後に置かれた。

#### [主語]＋[動詞前接辞＋人称代名詞＋動詞] (パターン B1)

- (6) dues            dy-            -m-            gwares

このパターンは動詞が単純動詞の場合にも類推的に広がる。但しその場合には人称代名詞が前接辞として何かに前節する必要があるために、主語の後に不変化詞 a が現れた。

#### [主語]＋[不変化詞 a＋人称代名詞＋動詞] (パターン B2)

- (7) Duw            a            -m            difero

更にこのパターンは目的語が名詞の場合や目的語のない場合（動詞が自動詞）にも現れるようになる。そうすると不変化詞 a は人称代名詞が結合するための場所という本来の目的を失い、動詞前虚辞として文構造の一部となる。

[主語] + [動詞前虚辞 a+動詞] + ([目的語]+…) (パターン B3)

(8) Duw a dywedodd y gair

(9) Duw a atebodd

「初めに」で述べたように、この文構造を持つ文が中期カムライグ語に無数に見られる。この文構造では主語の部分には強調はなく、この時代の「通常文」なのである。

### 5. 強調構文の発達

4. のパターン B3で、主語を強調する必要がある場合、その前に繫辞 bod の諸形を置いて「～をした・するのは～である」という意味の文構造を発達させた。これが強調構文である。このパターンから最初の bod の諸形が脱落する。こうして出来た文構造は、語順の上では 4. のパターン B3 と同じであるが、発音する際には主語の部分が強調される。

~~bod~~の諸形 + [主語] + [動詞前虚辞 a+動詞] ([目的語]+…) (パターン C1)

(11) ~~bu~~ Duw a atebodd (小池の例文)

### 6. 近代カムライグ語の語順

4. と 5. にまとめた主語が文頭に現れる二つのパターンの内、パターン B3 は徐々に英語の語順の模倣と見做され、避けられるようになる。その結果、主語を文頭に置く文としては強調構文のみが残り、いわゆる通常文としてパターン A3 の動詞が文頭に来る文構造が残った訳である。

### 終りに

Lewis は近代カムライグ語以前のパターン A,B,C といった様々な文構造の発達を「人民の、人民による、人民のための」ものであるとしている。つまり、文法学者が人為的に作り出した文法ではなく、カムライグ語を話す人々が互いに理解し合うという極めて日常的な目的のために言葉の中に自ずと生じた発達としている。パターン B3 を「英語の模倣である」ため「カムライグ語らしくない」という理由で非難し、やがてこの文構造がいわば人為的に廃れたこととは対照的である。Lewis は “Our manner of speaking to-day must not be taken as an infallible measure by which to judge what was or was not correct in bygone age” (p.21) と述べ、現代の文法判断基準で過去の文が正しいか否かを判断しがちな我々に警告を発している。